シニアミニストリーとスピリチュアリティーの質的研究

―― 宗教教育学の観点から ――

岡　村　直　樹（東京基督教大学准教授）

目次

１．ミニストリーの焦点 …… 113
２．スピリチュアリティーの概念とその定義 …… 115
３．質的研究方法とグラウンデッドセオリー …… 119
４．質的研究方法の範囲，利点，注意点 …… 122
５．研究例１：米国の日系人教会の女性高齢者を
　　対象にした「ライフストーリー」の質的研究 … 124
６．研究例２：日本人クリスチャンを対象にした
　　「老後観」に関する質的研究 …… 129
７．最後に …… 136

１．ミニストリーの焦点

近年，日本のキリスト教会において「シニアミニストリー」という言葉がもちいられるようになってきた。英語の「シニア（senior）」には，上級生や上級者を示す意味と，高齢者を示す意味の二通りがあるが，一般的に米国でシニアミニストリーとは，「クリスチャンによる，高齢者を対象としたミニストリー」という意味で用いられている。では一方の「ミニストリー」とは，どのような意味を持つ言葉であろうか。英語の

ＮＩＶ訳聖書では，ギリシャ語の diakonia という言葉が，ministry（ミニストリー）という言葉に訳されている[1]。同じ言葉の動詞形，diakonos が新改訳聖書では，「しもべ」（２コリント６：４，11：15，11：23）という言葉に訳され，更には動詞形，diakoneo が「もてなす」（マルコ１：31），そして「仕える」（マルコ10：45，ヨハネ12：26）という言葉に訳されている。ギリシャ語辞典によれば，diakoneo は，「必要を充足する，人生における必需を満たす」という意味を持つ言葉である[2]。これらの聖書の記述から，ミニストリーとは，「仕える者としてへりくだり，人々の必要を満たす働き」と言い変えることが出来るかもしれない。クリスチャンによるシニアミニストリーにとって，キリストの福音を「伝える」，聖書を「教える」といった能動的な働きが必要不可欠な要素であることは言うまでもない。高齢者に限らずともすべての人間は，キリストによる救いと聖書による導きを必要としているからである。しかしそれらの働きは，高齢者に「仕える者」としてへり下り，そして高齢者の「様々な必要」にしっかりと目を向けながらされるべきであると言えるのではないだろうか。これらの受動的側面，つまり「高齢者を理解し，その必要を知る」事は，キリスト教会のシニアミニストリーにおいてだけではなく，様々なコンテキストにおけるクリスチャン・シニアミニストリー，例えばキリスト教系の福祉施設等での働きにとっても重要な意味合いを持つのではないかと思う。

しかし高齢者を知り理解すると一口で言っても，それは決して容易なことではない。当然の事ながら高齢者は社会的，心理的，物理的な側面

（１）　*New International Version*

（２）　*Vine's Complete Expository Dictionary of Old and New Testament Words.* (W. E. Vine, Merrill F. Unger, and William White, Jr. eds., Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1985, p. 410) において‘diakoneo’は以下のように訳されている。“of relieving one's necessities, supplying the necessities of life”

と必要性を合わせ持つ存在である。そしてそれらの要素が複雑に絡み合い，ひとりの高齢者が形成され，さらに集まって高齢者社会，高齢者文化が形成されるのである。もちろん地域や言語，更には国という単位においての多様性も存在する。ではシニアミニストリーにたずさわる者は，高齢者の必要をどのような方法で知り，また理解する事ができるだろうか。もちろん個々の高齢者の様々な必要を知る出発点は，直接「あなたの必要を教えて下さい。」と尋ねることであろう。しかしどれだけの高齢者が，自分の社会的，心理的，物理的，またその他の必要を的確に，客観的に認識し，そしてそれらを包み隠さず，遠慮せずに語るだろうか。してみると，ただ単純に直接「必要について尋ねる」だけでは不十分なのではないかと考えざるを得ない。

２．スピリチュアリティーの概念とその定義

もちろん高齢者の持つ社会的，心理的，物理的，またその他の必要性を，第三者が完璧に知る事は不可能であろう。しかし「あなたの必要を教えて下さい。」という直接的な問いかけ以外に，それらを知る方法は無いのだろうか。筆者はここで，「スピリチュアリティー」という概念を，高齢者の様々な必要を知るために非常に大切な視点のひとつとして挙げたい。この言葉は様々な分野において違った形で定義される非常に定義が困難な言葉である。昨今メディアに登場する怪しげな「スピリチュアルアドバイザー」なる人々が，根も葉もない話で多くの人々を惑わしていることも気がかりである。しかし本研究では，言葉の定義にまつわる様々な争論について深く言及せず，筆者の専門領域である，宗教教育学の分野で一般的に受け入れられている定義を用いて本研究の議論を進めていきたい。

宗教教育学の分野で一般的に支持されている定義には，三つの特徴がある。第一に，スピリチュアリティーは宗教的背景やその有無にかかわらず全ての人にある特性，つまりそれはユニバーサルなものであると考えられている。第二に，スピリチュアリティーは個々の社会性や心理性と，それら成長の過程に密接にかかわり合っていると考えられている。宗教教育学のコンテキストにおいてこの語が用いられるとき，「人生の旅路」（life journey）という言葉が平行して頻繁に登場する所以である。第三に，スピリチュアリティーは，公共社会において考慮されるべき非常に重要な概念であるとされている[(3)]。

以上の特徴を総合し，本研究で用いる定義として以下を提起したい。

「スピリチュアリティーとは，個々が人生の旅路（歴史）で遭遇し影響を受けた様々な関係性（人や社会や神との関係）の中で培われ，人間の物質性，心理性，社会性と密接に関わり合いながらも，それらを超えた場所に位置し，生きること，成長することに意味を与える特性であり，更には非常に重要な公共的な意味合いを持つ概念である。」[(4)]

一方で福音的なクリスチャンが「スピリチュアリティー」を語るとき，

（3）　宗教教育のコンテキストにおいてスピリチュアリティーという言葉の定義を集めた研究 *Spirituality in Education: An Annotated Bibliography* (Estella Gutierrez-Zamano and Maiko Yasuno. Higher Education Research Institute, University of California, Los Angeles, January 2002. pp. 4–6) では以下のように結論付けられている。“Spirituality takes place at the unit of the individual within the community. It involves the interior life of the individual, as well as the community manifested by individuals acting both singly and in cooperation with one another. Spirituality is a personal journey toward growth and understanding, but it is a journey that we can articulate through shared approximations of meaning, intuition, and experience. … [There is] a need to include spirituality in public environments, like work and school, to better serve the needs of people that spend such large proportions of their day and, consequently, lives, in these settings.”

（4）　Ibid.

一般的にそれは「霊性」と訳され，「聖書の神との出会いや，聖霊の導きを通して聖書の教えによって形成されるクリスチャンの特性」として語られることが多い[5]。またそれは，クリスチャン以外の人と共有できるものであるとは考えられていない。上記の宗教教育学的定義のように，すべての人間に共有される「霊性」は，心理学や，社会学などの人間学的アプローチによるもので，「クリスチャンの霊性」とは分けて考えられ，さらにそれはある意味「二次的」なものとして扱われているようである。確かクリスチャンはその世界観や価値観において，クリスチャン以外の人たちのそれと大きく異なっていると言えるだろう。しかしだからと言って，クリスチャンとそうでない人の間に何も共通点が無いというわけではない。実際クリスチャンも，そうでない人も，地域生活という観点から考えるなら，その人生の旅路において受けてきた様々な社会からの影響の大きな部分を共有しているからである。神学的に言及するのであれば，それは「一般恩寵の範疇」（神が創造された自然や人間と，そこにある秩序や特性）において共有する部分ということができるかもしれない。クリスチャンのスピリチュアリティーと，そうでないものを「互いに異質なもの」として分けるという捉え方が成立する一方で，両者の共通点に着目し，「心理学や，社会学などの人間学的アプローチ等も用い解明された，ユニバーサル（すべての人が共有する）」な特性の上に，クリスチャンの場合では更に「信仰や聖書，聖霊の導き等による特性」が加えられたものとしてスピリチュアリティーを捉えることは，決して聖書的な人間理解を否定するものではないと考えられる。

では高齢者の持つスピリチュアリティーという（宗教教育学的定義に

（5）「霊性とは，私たちが神に出会い，神を体験すること，そして，その出会いと体験の結果，私たちの意識と生活が変容することに関する全て。」アリスター・E. マクグラス，稲垣久和監訳，『ポスト・モダン世界のキリスト教――21世紀における福音の役割』，（教文館，2004年）p. 205.

基づく）特性を知るには，具体的に何をすれば良いのだろうか。実はそのヒントを上記のスピリチュアリティーの「定義」に含まれる２つのキーワード，「歴史」と「関係」に見出すことができる。それは個々やグループが，過去から現在に至るまでの人生の歩みの中で，自身や他者，社会，宗教と（クリスチャンであるなら聖書，そして聖書に掲示される神と）どのように関わり合い，また成長してきたかついて吟味することから始まるであろう。それは，「この人（またはこのグループの人々）は，今までどのような人生を送ってきたのだろうか。」「この人には，どのような家族関係，人間関係があったのだろうか。」「この人はどのように宗教と関わってきたのだろうか。」といった事柄について質問し，そこから浮かび上がる「人間像」を知ることなのではないかと考える[6]。

では，具体的に過去から現在に至る様々な歩みの吟味を通して明らかになった事柄は，何に役立つのであろうか。私たち（特に西洋思想の影響を色濃く受ける者）は，何かを学ぼうとするとき，様々なインフォメーションを分析し，それを数量化，法則化することにより「よりコンパクトな形」，「より大きなくくり」でそれ捉え，考えることを好むという性質を持つ。例えば「高齢者の健康」「高齢者の心理」といった著作で語られる内容は，非常に一般化された概念や，数字化され，簡素化されたインフォメーションであることが多いのではないだろうか。もちろん「日本社会における高齢者ケア」というような大きな観点から見るならば，それらの情報の有用性を疑う事は非常識である。しかし一方でそのような情報は，クリスチャンによるシニアミニストリーのコンテキスト

（６）　聖書の中でパウロはピリピ３章を始めとする数箇所で，自らの人生をその生い立ちから振り返り，人や神との関わり合いの歩みを回顧しつつ，自らの信仰を説明している。これは彼が自らの過去の歩みの中で自身が形成されてきたことを認識していたからではないだろうか。そしてそれをパウロのスピリチュアリティーと呼ぶことができるかもしれない。

において，個々のユニークなケースに対する細やかなケアに必ずしもつながるものではない。統計学に基づいた量的なアプローチは必要であり，それ自体は否定されるべきではないが，すべての人をつねに「大きなくくり」で理解し，様々な問題を解決しようとすることは，個性の無視，更には人格の否定にもつながりかねない。ある意味，より小さなくくりである「個々のスピリチュアリティー」を深く検証することは，キリスト教会やキリスト教系福祉施設等において，より深いレベルの，より細やかなケアにつながるのではないかと考える。

３．質的研究方法とグラウンデッドセオリー（Grounded Theory）

筆者はシニアミニストリーのコンテキストにおける，高齢者のスピリチュアリティーを知り理解する手段として，質的研究という研究方法が有効なのではないかと考える。質的研究とは大まかに言えば，研究対象を数においてではなく，その質において理解し研究する事を指す。量的研究において研究の質は，数量的にサポートされた統計学的データに基づくものでなくてはならず，ある意味機械的にデータが解析，分析されていく過程でそれが決まるものである。一方質的研究に関しては，以下のようなユニークな特徴を挙げることが出来る(7)。

・質的研究は仮説を立てたり，その検証したりすることを目的としない。
・質的研究は実験的研究状況を設定しない。
・質的研究はインタビューやその他の観察を重視し細かい記録を作成する。

（７）　Michel Quinn Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods* (Thousand Oaks, California: Sage Publications, Inc., 2002).

・質的研究は研究過程での研究者の主観を考慮しその内容を取り入れる。
・質的研究は記録以外に得られた資料も排除せず総合して検討する。
・質的研究は研究対象の一般性や普遍性より，具体性，個別性，多様性に即する分析を行う。
・質的研究は研究対象や，そこに派生する様々な問題を社会・文化的な文脈の中で取り扱う。
・質的研究は質的データに基づいて分析，理論化を行い，現象に内在する意味を見出す。

質的研究は具体的な事例を重視し，個々の現象を時間，地域性といった特殊性の中で捉えようとする方法である。また特に人間自身の行為や表現を出発点として，それを実生活の場所と結びつけて理解しようと試みる方法でもある[8]。さらにこの研究方法は，量的研究が取り扱いを躊躇する，人間の立ち振る舞い，感情の動き，直感といった部分にも大胆に切り込むことを可能とするのである。

質的研究のアプローチを科学的な研究方法にまで押し上げた功績を持つのは，バーニー・グレイザーとアンセルム・ストラウスの２名である。彼らの質的研究方法論は，グラウンデッドセオリーとして知られ，データ収集，データ分析，理論構築という３つの主な段階から構築されている[9]。例えばインタビューを中心に据えたデータ収集の場合，研究者は自らの予見に頼らず，研究対象者が出来る限り自由に語ることが出来るよう心がけつつ質問の内容や，話しの導き方をオープンに保つことが必

（８）　ウヴェ・フリック，『質的研究入門―〈人間の科学〉のための方法論』（春秋社，2002年）p. 19.
（９）　Anselm Strauss and Juliet Corbin, *Basics of Qualitative Research* (Thousand Oaks, California: Sage Publications, Inc., 1998), p. 12.

要とされる。またインタビューの内容そのもの以外にも，研究対象者の語調，顔の表情，体の動き，視線，服装等までもがデータとして記録されることもある。研究対象者の数も，量的研究の場合のように多くを必要とはしない。広く浅く学ぶのではなく，狭く深く学ぶことから，研究対象者や対象とする様々な現象をどれだけ深く掘り下げることが出来るかという点が重要なのである。データの収集後，研究者が理論の構築に進むには，まずデータ分析を通じてさまざまなカテゴリー（まとまり）を生成し，それらを階層的に組織化していくことが必要である。例えばある社会現象を質的データを通して分析しようとする場合，カテゴリー生成の枠組みには，２つの側面が存在する。その社会現象が生起する条件，要因，状況，現象からどのような結果が生まれているかという構造的側面と，その社会現象がどのような展開や，やり取りを経ているのかというプロセス的側面である(10)。またデータ分析のために必要なもう一つの手法にコーディングがある。コーディングとは，データ中の諸概念を識別し，特性を発見した上で構造的に関連づけ，新たな概念を構成し，理論化を可能にするためにコード（コードワード）を付ける作業である(11)。最終的な理論構築は，グラウンデッドセオリーの到達点とも言える。質的に得られたデータを分析し，そこに見出すことのできる共通点や相違点等から理論構築を行うのである。グラウンデッドセオリーという名前からもわかるように，構築された理論は推論や試論に基づくものではなく，現象が起こっている現場，つまり「グラウンド」（地面，地べた）から直接に得られたデータを基に築かれたものであり，最も現実に近いものとなるのである。

質的研究はともすると「単なるインタビューの記録と，そこから主観的に導き出される研究者なりの解答」と考えられてしまうことが多いが，実際は非常に細かいデータ分析を必要とする研究方法である。しかし一

(10)　Ibid., p. 123, p. 192.
(11)　Ibid., p. 153, p. 179.

方で，量的研究のようにいわゆる科学的合理性に優れている研究方法ではなく，主観的で直感的な側面を持ち合わせる研究であることもたしかである。実際，質的研究の第一人者であるマイケル・クイン・パットンは，質的研究のデータ分析を「科学であり芸術」（the science and the art of analysis）と呼び，研究者の創造性を研究の重要な要素としている[(12)]。質的研究は近年，様々な研究分野において用いられる研究方法となっている。特に心理学，看護学，教育学，社会学，文化人類学等においては，ひとつの主流な研究方法として確立されつつある。

４．質的研究方法の範囲，利点，注意点

質的研究方法（グラウンデッドセオリー）は，シニアミニストリーにたずさわる者が，ある具体的な課題や問題について考え，それについて高齢者から知ろうとする場合にも用いることができる。例えば「教会のシニアミニストリーにおいてどのようなプログラムを用いて高齢者の信仰成長を促すか。」「キリスト教系福祉施設においてどのような方法で施設内の人間関係の向上を目指すか。」といった具体的な課題にも応用できる。個々の高齢者やグループの考え方，意見，好き嫌いは，過去から現在につながる「歩み」の上に形成されており，そこには様々な要因が働いているのだという事（これを本研究ではスピリチュアリティーと呼んでいる）を念頭に研究を実行するのである。研究実行者は，インタビューの質問を自らが取扱いたいトピックにある程度的を絞って考えることができるが，「このような答えが返ってくるのでは」といった予見や先入観をなるべく避け，出来る限りオープンな状態を保ったデータ収集を心がけなければならない。

（12）　Patton, pp. 542–458.

また，質的研究方法がミニストリーの現場で用いられる場合，成果となるのは，研究データの分析から導き出された様々な結論であることは言うまでもないが，実は研究プロセス自体の中にも以下のような利点が存在する。

１）まずこの研究方法では，ミニストリーにたずさわる者が，ミニストリー対象者から学びたいという謙る姿勢を示し，と顔と顔を合わせて向き合い，意思の疎通を図る事が必要不可欠な要素となる。ミニストリー対象者はそこで自由に語る事が許されるのだが，そのプロセスそのものに，カウンセリング的価値が見いだされる場合が少なくない。高齢者は，「胸の内を語る場が与えられた」，「自分の意見が聞かれている」，「私は無視されているのではなく，大切にされている」等の感情を抱く場合が多く，この体験そのものがポジティブに作用するのである。

２）研究対象者がインタビューやグループディスカッションにおいて意見や答えを口述するプロセスの中で，自らの感情や思いが整理され，それが新たな自己発見につながることも頻繁に起こる現象である。実際この自己学習は，現象学的教育方法と呼ばれ，特に宗教教育の分野において効果的な教育方法のひとつとして数えられている(13)。

さて，ミニストリーというコンテキストにおける質的研究の流れを簡単に説明したが，実際にこの研究方法を用いるには，更なる専門的なアドバイス（質的研究方法セミナーでの学び等）が必要になると思われる(14)。またこの研究方法を用いる者に，多少の向き不向きがあることも想像できる。研究担当者は，対象者の心を開き，そこから様々なデータを引き出すことが求められる。対人関係におけるラポール形成も，研究

---

(13)　Mary Elizabeth Moore, *Teaching from the Heart: Theology and Educational Method* (Harrisburg, Pennsylvania: Trinity Press International, 1998), pp. 93–98.

(14)　学術論文として執筆する場合には，専門家の指導のもとに研究を進めることが必要であろう。

の重要な要素のひとつであり，更に人間に対する観察力や，直感的なデータ分析力も問われるからである[15]。また質的研究は基本的に，非常に限られた地域で，限られた人数を対象にして行われるため，研究の結果を直ちに広く一般化することが出来るとは考えにくい。さらに時の流れと共に，人間も社会も変化することから，研究結果の実際の有効期間も様々であろう。確かに研究結果が応用される範囲は広くはないかもしれないが，クリスチャンの立場から，同様の研究が積み重ねられ，さらに様々な研究がそこを出発点として始まることに重要な意義があると考える。

では以下では，過去に筆者が実施した，クリスチャンを対象とした質的研究の実例（要約）に目を向けることとする。

５．研究例１：米国の日系人教会の女性高齢者を対象にした「ライフストーリー」の質的研究[16]

ａ）研究の背景

米国カリフォルニア州において筆者が牧会に携わっていた日系人教会では，毎週水曜日の午前中に「シニアミニストリー」という集会がもたれており，80人前後の高齢者（70代，80代の女性が大多数を占める）クリスチャンが集まっていた。1941年，日本軍の真珠湾襲撃によって戦争の火蓋が切って落とされた直後から，米国西海岸に住む多くの日系人は敵視され，様々な差別や迫害を受けた。戦いが続く中で米国軍部も，数

(15)　ラポールとは，心が通い合った関係，親密な信頼関係を表す言葉で，主に臨床心理学の分野で用いられる言葉である。パットンはラポール形成を質的研究におけるひとつの大切な要素として語っている。(Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods,* pp. 365–366.)

(16)　本研究は2008年に出版された学会誌，「福音主義神学」に掲載されている論文の一部である。

十万人もの日系人の存在に危機感を抱き，1942年のルーズベルト大統領令に基づいた大規模な強制移住を行うことにした。西海岸に住む日系人はその多くが米国の市民権を有していたにもかかわらず，商売や家財道具を二束三文で売り払うことを余儀なくされ，着の身着のままで，主に砂漠地帯や荒野に設営された粗末な収容所へと向かったのである(17)。この教会のシニアミニストリーの出席者の大多数は日系２世で，第二次大戦中の収容所生活とその前後の日系人排斥運動を体験していた。筆者はこの集会に定期的に出席する中で，まず彼らの明るさ，人柄の良さ，謙遜さに目を奪われた。もし自分が収容所生活や長期にわたる人種差別を体験していたら，もっと苦々しい感情で心が満たされるのではないかという思いから，彼らに学びたいと感じ，グラウンデッドセオリーを用いた質的研究を実施することにしたのである。

ｂ）研究の経緯と結果分析

研究開始の時点で筆者は既に２年以上もこの集会に定期的に出席し，筆者の目からは良好と思われる人間関係を彼らとの間に築いており，研究参加者（複数回のインタビューを受けてもらう）を募ることはさほど難しくないであろうと思っていた。しかし研究は予想に反し，開始時点から思わぬ苦戦を強いられた。ほとんどの高齢者は自らの過去，特に個人的な人生体験を語ることに後ろ向きで，「私の話しはつまらないですよ。」「○○さんの方が興味深い話しを持っていますよ。」などと言っては，非常に消極的な態度を見せた。現役引退後何年も経つ彼らは仕事で忙しいわけでもなく，孫ほどに年齢の離れた筆者に対して「思い出話し」を自由に語るという，一見簡単そうなことを拒んだのである。実際，教会に集う彼らの子どもや孫達も，祖父母の人生体験をあまり聞いていな

(17)　Mitchell T. Maki, Harry H. L. Kitano, and S. Megan Berthold, *Achieving the Impossible Dream: How Japanese Americans Obtained Redress* (Urbana: University of Chicago Press, 1999), p. 30.

いと後日証言している。シニアミニストリーでの明るい友好的な人柄とは対照的なこの態度に筆者は更に興味をかき立てられ，個別に頼み込んで，第二次世界大戦中に収容所生活を体験し，少なくとも30年以上はクリスチャン生活を続けている10人の高齢者から話しを聞くことに成功した。むろん個人差はあったが，以下は，オープンエンデッド・クエスチョンを用い，出来る限り自由な発言を促したインタビューと，彼らの行動観察から得たデータから，カテゴリー化やコーディングのプロセス等を経て見出された共通点である。

1）彼らは自らの人生体験についてのインタビューを受けることに，非常に違和感を感じているようであった。
2）彼らは自らのインタビューの内容が筆者の研究に役立たないのではないかと危惧する言動を繰り返した。
3）彼らは自らの体験した収容所生活や日系人排斥運動に関して，ほとんどネガティブな感情を出さず，どちらかというと第三者的に淡々と語り，「がまん」「しょうがない」という言葉を多くもちいた。（インタビューのやりとりは英語であったが，これらの言葉に関しては日本語を用いた。）
4）彼らは「収容所生活は大変でしたか。」という問いかけに対して，「いいえ」又は「そうでもなかった」と答えた。
5）彼らは米国政府や日本政府に恨みを抱いていないと語り，良い市民になることを心がけていると強調した。
6）彼らは高齢化による現在の自らの健康状態の悪化や，配偶者や友人の死に関して，上記同様「がまん」「しょうがない」という言葉を多く用いた。
7）彼らは自らの信仰生活に関して，教会や牧師に従順であることを大切にしていると語り，神への服従を強調した。しかし一方で，聖書の自主的な学びには消極的な姿勢を見せた。

8）彼らは友人を教会に誘うが，福音を語る，救いの証しを語るといった個人伝道には消極的であった。

9）彼らは自らが率先してリーダーシップをとることに消極的であった。

筆者は当初，シニアミニストリー出席者の明るさや，友好的で謙遜な態度に感心したが，実はその背景にネガティブな感情を出すことや自己主張の躊躇，また自己に対する自信の無さがあるのではないかと強く感じるようになった。日系人は第二次世界大戦後の米国史において「モデル・シティズン（模範的市民）」，「サイレント・マイノリティー（自己主張しない少数派）」[18]などと紹介されることが多いが，確かに外からはそう見えたことだろう。更にこのインタビューの結果を通して気が付いたことがあった。それは1956年に書かれた心理学の著作 *Women's Ways of Knowing*（女性の認識）に紹介されている，社会差別や，ドメスティック・バイオレンス（ＤＶ・夫による暴力）によって傷ついた女性の性質と，このインタビューの対象者の性質が酷似している点である[19]。上記の研究では，度重なる差別や暴力によって女性は自己保身のために自己主張をしなくなり，また社会や夫に象徴される権威に対して盲目的に従順となる傾向があると報告されている。シニアミニストリーの高齢者も，戦前から続いていた日系人排斥運動や，戦時中の収容所生活，更に戦後も長く続いた日系人差別を経験し，自己保身のために身の上に起こる様々な苦難を「しょうがない」事として「がまん」することを覚え，国に対して，更には教会や牧師に対しても従順になることが得策として信仰生活を送ってきたのではないだろうかと信じるに至った。もしそうであったならば，インタビューによってあきらかになったこのグループの

---

(18)　Sharon M. Fujii, "Older Asian Americans: Victims of multiple jeopardy," *Civil Rights Digest 9:22-9* (fall 1976): 22-29.

(19)　Belenkey, Clinchy, Goldberger, and Tarule.（*Women's Ways of Knowing,* pp. 6–7）

高齢者の言動の説明がつくからである[20]。

c）研究結果と牧会的配慮の必要性

シニアミニストリーに属する日系人高齢者クリスチャンは，教会においてのいわゆる「トラブルメーカー」ではなかった。彼らは明るく，礼拝をはじめとする教会の様々な集会に出席し，教会内外における人間関係も良好であり，更に献金に対しても熱心であったからである。しかし，聖書の自主的な学びや個人伝道には消極的であるという一面も持っていた。一見模範的な市民，そして模範的なクリスチャンに見えた彼らの従順さが，長年にわたる差別や迫害を原因とする自己卑下，自己保身によるものであるとすれば，教会において彼らに対する牧会的配慮がなされる必要が出てくるのではないだろうかと筆者は強く感じた。心の深いところにある傷を取り扱う必要性もさることながら，自己卑下はクリスチャンの使命である証しと，伝道に対する情熱を奪い，また権威に対する盲目的な従順は，**自主的に聖書を調べ学ぶ姿勢**[21]からクリスチャンを遠ざけ，更には**間違った権威，例えば聖書的ではない教えやリーダー等を見分ける判断能力**[22]に悪影響を与えるからである。また聖書的なセル

---

(20)　多くの日系二世は移民前の日本文化の影響により「遠慮」や「謙遜」といった気質を持ち，それらがインタビュー等に影響を及ぼしたであろうことは十分考えられる。しかし一方で第二次世界大戦中に収容所には送られず，比較的差別の度合いが低かったハワイの日系移民は，同じ日本人の伝統の背景を持ちながらも，本土の日系移民とは違う非常に開放的な気質を持っていることが報告されている。そのことからも本研究に加わった日系人が自らを語ろうとしなかった理由が，彼らの持つ日本人的気質のみによるとは考えにくく，やはり米国本土における差別の影響が大きかったのであろうと筆者は確信している。（参考：フィールドワークとしてのライフヒストリー研究の展開と課題―カウアイ島（ハワイ）日系人のライフヒストリー調査プロジェクトを事例として― *JOURNAL OF POLICY STUDIES* 総合政策研究 NO. 13：2002年９月，pp. 67－90.）

(21)　使徒の働き17章11節ｂ「非常に熱心にみことばを聞き，はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。」（新改訳聖書）

(22)　ピリピ書３章２節ａ「どうか犬に気をつけてください。悪い働き人に気をつけてく

フ・アイデンティティーの確立，つまりキリストによる十字架上の贖いに代表される神の愛を理解し，「わたしの目には，あなたは高価で尊い。」[23]という言葉を日々感じながら生きることは，クリスチャン生活の喜びの源である。この最も基本的な神の言葉を実感することが無かったとしたら，それはひとつの非常に大切な霊性の要素を欠いた信仰生活と言えるかもしれない。

この研究の結果は，シニアミニストリートに集まる多くの高齢者の霊性を吟味するひとつの手段として教会の牧師とシニアグループの責任者に報告され，以降ミニストリーの参考とされた。具体的には，礼拝メッセージや，特にシニアミニストリートでの学びの際に**神の恵み**や**受容**の教えが強調され，また聖書の学びに自主的に取り組む姿勢の重要性が語られた。更にはシニアミニストリーにおいて，まず似た境遇を共有する者同士が練習の意味も込めて互いの経験談や信仰の体験談を語り合い，その上で更に家族や友人にも自らの信仰の証をするという段階的アプローチが勧められた。

６．研究例２：日本人クリスチャンを対象にした「老後観」に関する質的研究

ａ）研究方法

本研究はマイケル・クイン・パットンの著書，*Qualitative Research and Evaluation Methods* に記述されたグラウンデッドセオリーのガイドラインに沿って2008年に実施されたものである[24]。研究対象の候補となった

ださい。」（新改訳聖書）

(23)　イザヤ書43章４節ａ「わたしの目には，あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」（新改訳聖書）

(24)　Patton, p. 124.

のは，関東圏にある８つのキリスト教会に在籍する男女である。研究対象者を絞り込むために，上記の著書に記されたガイドラインに沿ってHomogeneous Sampling を選択し，以下の共通点を持つ中高年男女を30人が選ばれた[25]。

１）45歳以上の男女[26]
２）自らをクリスチャンと認識する者
３）自らの信仰歴を少なくとも30年以上と認識する者
４）比較的健康で，定期的な教会出席が可能な者
５）シニアミニストリーに関心を持っていると語った者

また情報データソースの多元化のために Triangulation of Sources の概念を用い，個人インタビュー，グループディスカッション，および言動観察を行った[27]。更に個人インタビューとグループディスカッションにおいて，以下の２つの質問を用意した。

１）「あなたの理想的な老後の様子ついて自由に話して下さい。」
２）「あなたの過去を振り返って，今語って下さった理想的な老後観がどのように形成されたかについて自由に話して下さい。」

これらの Open-ended Interview Question を用い，出来る限り自由に，

---

(25)　サンプリング（Sampling）とは量的研究のように大人数を研究の対象とすることの出来ない質的研究において，より意図的（purposeful）に研究対処者を選択しようとするプロセスを指す言葉である。均質サンプリング（Homogeneous Sampling）とは，一定のサブグループをより深く知ろうとする際によく用いられる方法で，いくつかの条件をつけて研究対象者を絞り込むのである。（Patton, p. 235.）
(26)　年齢何歳からを中高齢者と呼ぶかについての明確な規定は無いが，本研究では45歳という年齢を線引きの目安として採用した。
(27)　Patton, p. 247.

そして率直に発言することを促した[28]。更にこれらの質問への自由な返答に対して，「それはどういう意味ですか。」「もうすこし詳しく話して下さい。」といった答えの明確化を促す質問をフォローアップとして用いた。言動観察では研究に参加した高齢者が公共の場で語る，コンフィデンシャルな性質を持たないと思われる話しや，研究者との会話の中で，本研究に関連性があると思われる部分を書き留めたものである。

b）データ収集と結果

研究者は集められたデータをカテゴリーで別け，さらにコーディングを通してさらなるデータの細分化と生成を試みた。以下はインタビューやグループディスカッションによって得たデータから導き出されたパターンにもとづく結果である。

1）研究参加者の中で最も若かった45歳の女性から，最も高年齢であった82歳の女性までのインタビューデータを年齢順に検証したところ，まず1つのパターンが最も目につく形で浮上した。それは老後の希望について答えるとき，「海の見えるところに住みたい。」「自然豊かな場所で自足自給の生活がしたい。」「日本中を旅したい。」「ボランティア活動に従事したい。」「勉強する意欲を持ち続けたい。」といった，具体的に「したいこと」に関する答えが年齢の上昇とともに減少し，反対に高齢者としての自らの現状が継続することや，穏やかな生活といった，「こうありたい」という答えが増加したことである。例えば「健康でいられればこのままで良いと思っている。」「今の生活に感謝している。」「おだやかな気持ちで老後をすごしたい。」「笑顔を忘れないでいたい。」「現状が長く続けば満足。」「信仰生活が続けられれば良いと思う。」といった答えが増えた。

(28)　Ibid. p. 342.

２）また40代，50代の人からの答えにあまり見受けられなかった「人間関係に対する期待」に関する回答が，年齢の上昇とともに目に見えて増加した。「にこやかに孫と遊びたい。」「家族そろって教会生活を続けたい。」「教会の方々の訪問を受けたい。」「ありがとう！を口癖に周囲の人たちに受け入れられるおばあちゃんになりたい。」「信仰の友と過ごす時間を多く持ちたい。」「共に祈り合える友人の輪にいたい。」等である。

３）年齢を問わず，「あなたの過去を振り返って，今語って下さった理想的な老後観がどのように形成されたかについて自由に話して下さい。」という質問の答として最も多かったのは，祖父母や両親，知り合いを含めた高齢者の老後を実際に見たことからの影響であった。「両親が仲良く老後を送っている姿を見て，私もああなりたいと思った。」「母の毅然として生きていた態度を見て尊敬していた。」「教会の兄弟姉妹の老後の様子を見て感動した。」「引退された牧師先生ご夫妻の姿が模範です。」といった，ポジティブな影響を語った答えも多かったが，「親戚の老後の様子を見て，ああはなりたくないと思った。」「仕事で関わっていたおじいいさんの様子を見て，私はにこやかな老後を送りたいと感じた。」といったネガティブな影響に関する答えも多かった。

ｃ）データ分析

上記の結果を更に詳しく見ていきたい。まず上記のデータ収集結果（１）で現れたパターンは，中年から高齢に移る過程の中で，研究参加者の多くによって，自らの老後に対する希望が，「旅をする」「ボランンティア活動をする」という何かを「する」ことから，「健康であれば満足」「いつもニコニコ笑顔でいたい」といった，どう「ある」べきか，に置き変えられたものと分析することは出来ないだろうか。この「する」と「ある」の違いについて考えて見よう。高齢者介護に関する三好春樹との共著の中で芹沢俊介は，向老期（老いへ向かう時期をそう名付けた）を

「する」と「ある」のせめぎ合いの時期とした。一般社会は「する」行為によってもたらされた功績（何か事を成し遂げて得た手柄）によって人の価値を判断するが，高齢になると様々な身体的制限が加わり，「する」ことが制限される。したがって高齢者は，「すること」によってではなく，「あること（今ある姿そのもの）」に価値を見いだす必要があると主張し，それが高齢期を幸せにすごす必要条件であるとしている[29]。また，高齢者の心理的成長に言及する「ライフサイクルから見た発達臨床心理学」の著者は，高齢者の直面する危機について以下のように語る。「老いの自覚は多くの人にとってショックであり，そのことから人生に失望したり，悲観的になったり，うつ状態になったりする人もいる。しかし，老年期を絶望の時代にしないためにも老いの自覚を自己のパーソナリティーに統合し，心の適応の仕方を再編成しなければならないのである。」[30]（１）に見受けられたパターンから，本研究の参加者は，高齢者の直面する危機を，現実的な視点を持ち，自らの価値判断を「すること」から「あること」に変えることによって乗り越えて行こうとしていると分析する事ができるかもしれない。

上記のデータ収集結果（２）に見られた特徴は，「人間関係に対する期待」に関する回答が，年齢の上昇とともに増加したことだが，高齢者にとって，助け合いの人間関係（ソーシャルネットワーク）が重要である事は，多くの研究者によって検証されている。河合千恵子は『配偶者を喪う時』の中で，配偶者を失った184人の中から妻，夫たち８人の事例をまとめ，ソーシャルネットワークの大切さを説いている[31]。社会学者の浅川達人は，男性では「親しい友人」が，女性では「近所の人」およ

(29)　三好春樹，芹沢俊介著『老人介護とエロス』（雲母書房，2003年）。
(30)　川端啓之・杉野欽吾・後藤晶子・余部千津子・萱村俊哉著『ライフサイクルから見た発達臨床心理学』（ナカニシヤ出版，1995年）p. 191。
(31)　河合千恵子著『配偶者を喪う時』（廣済堂，1990）。

び「親しい友人」との接触が主観的幸福感に影響をおよぼすとしている[32]。また人間福祉学研究の古谷野亘は配偶者の有無と親戚・友人ネットワークが主観的幸福感に関連すると記している[33]。本研究に参加した多くの高齢者が人間関係，特に教会における人間関係に対する期待について多く語ったという事実は，教会における助け合い，つまり高齢者サポートのための教会のソーシャルネットワークの更なる充実を求めているためと分析できるかもしれない。

上記のデータ収集結果（３）に見られた特性とは，本研究に参加したクリスチャンの考える「理想的な老後観」の形成に最も大きな影響を与えたのが，彼らが今まで見た，彼らの身近な人たちの姿であったということである。これは，その背景にある２つのことを示唆すると思われる。ます第一に，老後観形成に最も影響をもたらしたのが他者の様子であったという答えは，彼らの持つ老後観が，個々がそれぞれの過去の歩み（また現在進行する歩み）の中で遭遇した人間関係によって大きく左右された（される）という事実である。第二に，老後観は，クリスチャンの持つ世界観や価値観の一部であるという事ができるかもしれないが，その非常に大切な価値判断の大部分が，聖書の言葉や教会で聴く説教等によって形成されたのではないという事実である。

ｄ）研究結果をふまえてのシニアミニストリーの課題点

１）米国アズベリー神学校の教授で牧会カウンセリングが専門のFrederick C. Van Tatenhove 教授は，キリスト教福音派の立場から高齢者の持つべき価値観を「すること」と「あること」を，「Doing and

(32)　浅川達人・高橋勇悦著「都市居住高齢者の社会関係の 特質―友人関係の分析を中心として」（総合都市研究，東京都立大学都市研究所編，1992年）p. 69－95。

(33)　古谷野亘「団地老人におけるモラールと社会関係性と配偶者の有無の調節効果」（社会老年学，35，1992年）p. 3－9.

Being」という言葉を用いて解説している。Van Tatenhove は，聖書的な人間の価値観は，キリストの十字架のあがないによって救われた人間の「ある姿（ありかた）」によるもので，決して「行い」つまり「すること（したこと）」に」よるのではないことから，高齢者もみずからのBeing「あるすがた」に価値を見いださなければならないと主張している[34]。本研究の信仰歴30年以上のベテランクリスチャン高齢者たちが，自らの体に高齢化という肉体的な制約が加わる中で，「する」より「ある」に目を向け，現実を受け入れ，感謝するようこころがけたように，様々なコンテキストにおいてなされるシニアミニストリーにおいても，その事が聖書的な高齢者の姿として強調されるべきであろう。

２）新約聖書，使徒の働き６章１節からの記述は，初代教会においてやもめ（第１テモテの記述では60歳以上の女性を指す）に対するケアの必要性とその充実が教会の急務としてとりあげられている。更に第１コリント12章25節からの記述は，クリスチャンの兄弟姉妹による「いたわり」の精神の重要性を，体の器官に置き変えて教えている。教会におけるソーシャルネットワークの存在は，聖書に記されている命令のひとつであることを認識し，様々なコンテキストでのシニアミニストリーにおいて，高齢者ケアの一環としてのソーシャルネットワーク作りが推進されるべきであろう。

３）本研究に参加したクリスチャンが抱いた理想的な老後観の形成に，最も大きな影響を与えたのは，身近な人たちの姿であった事は大変興味深い。クリスチャン，特に高齢者クリスチャンは，自らの見せる姿が，次の世代のクリスチャンの老後観に大きな影響を及ぼすということを認

(34)　Frederick C. Van Tatenhove, “Evangelical Perspectives,” in *Aging, Spirituality, and Religion,* ed. Melvin A. Kimble, Susan H. McFadden, James W. Ellor, and James J. Seeber (Minneapolis: Fortress Press, 1995), pp. 420–422.

識し，高齢者としての「あかしの任」を感じる必要があるであろう。

４）本研究に参加したクリスチャンが抱いた理想的な老後観は，聖書の言葉や教会で聴いた説教等によってではなく，主に個々の他者観察の結果としてもたらされたと語られたことは，今日の日本のキリスト教会が，老後についてあまり意図的に教えていないという実状を示唆しているのかもしれない。聖書に基礎をおいた高齢者観，老後観に関する学びが，これから更に進められていくべきであろう。

７．最後に

最後に，質的研究（グラウンデッドセオリー）の特徴を再確認してこの研究を閉じたい。本研究は，スピリチュアリティーの宗教教育学的定義（個々が人生の旅路で遭遇し影響を受けた様々な関係性の中で培われ，人間の物質性，心理性，社会性と密接に関わり合う特性）に着目し，質的研究の方法論を用いて実施されたものであるが，研究者は研究を通して研究対象者のスピリチュアリティーのごく一部を垣間見たに過ぎない。したがってそこから導き出される結論や提言は，非常に限定的なものである。更に質的研究はその性質上，研究者の主観がデータ収集から分析に至るまでの随所に用いられており，またそれを抜きにしては成立しない。本研究とそこに表れている研究者の主観を，根拠の無い駄論とするか，あるいはある程度の信頼に値するものと見るかは，ある意味読者の裁量に委ねられている。またこの研究は非常に限られた地域で，限られた人数を対象にして行われているため，研究の結果を直ちに広く一般化することが出来るという性質の研究ではない。さらに時の流れと共に，シニアもまたシニアをとりまく社会も変化することから，研究結果の実際の有効期間も様々であろう。しかし一方でこの研究は，第三者の推論

や試論だけに基づくものではなく，現象が起こっている現場，つまり「グラウンド」（地面，地べた）から直接に得られたデータを基に構築されたものであり，その結果は，最も現実に近い結果である可能性を秘めているのである。

当然の事ながら，信仰の成長や神による個々の心のケアは，聖霊なる神の成せる業でもあり，その働きを無視したり過小評価したりすることは決して許されることではない。また救いや信仰の成長のメカニズムを人間の視点からのみ解明しようとし，聖霊の働きを抜きにして同じような結果を再現しようとするような試みも避けられなければならない。しかし一方で「それゆえ，あなたがたは行って，あらゆる国の人々を弟子としなさい。」(35)というキリストの大宣教命令に従うべきクリスチャンが，様々なコンテキストにおいてどのように人々が神の救いに至り，成長し，また神によってその魂が取扱われるかいう経緯を観察し学ぶことは，教会の歴史の中で反復されてきたことでもある。繰り返しになるが，ミニストリーのコンテキストにおいて応用される質的研究，特にグラウンデッドセオリーは，研究者が頭の中だけで作り出した推論や理論ではなく，過度に一般化された人間論や文化論だけに基付くものでもなく，神が創造され支配されているこの世の中で実際に起こっている現象を観察，分析し，そこから沸き上がるパターンや規則性に，問題解決のひとつの糸口を見出そうとする試みなのである。これから先このような研究が頻繁に実施され，シニアミニストリーの理解がさらに深まる事を祈りたい。

---

(35)　マタイ28章19節ａ（新改訳聖書）